

2013年12月15日 待降節第三主日礼拝

説教 そのひとり子を

ヨハネの福音書3章16-21節

【お母さんみたいですね】

最近の「一年12回で聖書を読む会」で、「神さまは、お母さんみたいですね」とおっしゃった方がおられました。母の愛は、一方的な愛。子どもが立派だから愛するのではない。立派でなくても、よい子でなくても愛する愛。神さまの愛が、おかあさんの愛に似ているとおっしゃった。これは福音の確信にかなり近づいた発言だと思います。これらの参加しておられる方々が「私を愛してくださる私の神」と神さまを呼ぶようになっていただきたいと思います。

【そのひとり子を】

「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された」(3:16)。ここで「与える」と訳されている言葉には、実は「捨てる」「放棄する」「見捨てる」というニュアンスがあります。クリスマスには、最大のプレゼントは主イエスであると語られます。もちろんそれはそうなのですが、そこには主イエスの大きな痛みがありました。「わが神、わが神、どうして私をお見捨てになったのですか」と十字架の上で叫んだ主イエス。そして、父なる神にも大きな痛みがありました。「どうして、お見捨てになったのですか」と叫ぶ御子に対して父なる神は何もお答えになっていません。その沈黙

はどんな言葉よりも父なる神の苦しみをよくあらわしています。

【世を愛された】

どうして御子は捨てられなければならなかったのでしょうか。「世を愛された」とあります。「世」というのはすべての被造物。この世界のすべてのものを造ったのは神さまです。それは愛するため。神さまが、愛するために造った私たち。神さまが、愛するために造った世界。

ところがこの世界は傷ついてしまいました。人間の社会も自然界も多くの問題をかかえてうめいています。そして私たちひとりひとりも、損ねられてしまいました。私たちは神さまを知らないで生まれてきます。そして、損なわれた世界で生きる中で、心の深いところに傷や歪みを受けています。だれかのひとことが、なにかのできごとが、そこに触れるときに、私たちは飛び上がるようにして、反応してしまいます。自分ではそんな傷があることにさえ気がついていないのですが、神さまはすべてご存じです。そしてそこに触れていやして下さいます。罪はただ赦されるだけではなく、その原因をいやしていただく必要があるのです。

そのために、たったひとつ、必要なことがあります。それは、「神さま、私にふれないでください。あなたにだって私の傷に触れてもらいたくない」そうってはならないことです。それは傲慢の罪です。神さまなしでもやっていけ

るという傲慢。ちょっと見ただけでは、なんとかやっているように見えるかも知れません。けれども、いやされないでいる心の傷は、私たちをすり切れさせていきます。自分も自分の周りの人びとも、すり切れさせてしまうのです。

【コルベ神父】

コルベ神父はポーランドの人ですが、1930年から6年間日本で伝道しポーランドに帰国しました。やがて第二次世界大戦が始まると、コルベ神父はナチスに反対したというので、ゲシュタポに捕まえられました。そしてあのアウシュビッツ収容所に入れられました。その年の夏のある日、神父と同じ班から脱走者が出ました。その班全員が集められ、その中から10人が餓死刑にされることになりました。脱走者を出した連帯責任と見せしめのためです。そのとき10人の中のひとりに「私には妻も子もいるのです」と言って泣き崩れた人がいました。ガヨヴァニチェクという人でした。すると神父が身代わりになることを申し出、賛美と祈りのうちに2週間を生き延び、最後は薬殺されました。1941年8月14日、コルベ神父47歳のときでした。戦後、ガヨヴァニチェクは、神父の愛の犠牲を語り続けました。私たちも、私たちを愛し、私たちのためにご自分を与えずにはおられなかった主イエスを語らずにはおられません。このお方こそ「愛の神」であることを人々が信じ、救われるためにです。